

14席の小さな店。靴を脱いで入るので、客の滞在時間が長い。つまり、回転率が悪い。メニューは4枚しかないので機会損失もあるだろう。店員は雇わずすべての仕事を一人でこなす。店の名前は、「たまにはT S U K Iでも眺めましょ」。11年前、高坂勝さん(44)が東京・池袋に開店したオーガニックバーだ。

売り上げを下げる努力

コンセプトは、「絶対に右肩上がりしない店」。自分がどんな暮らしをしたいのか。そのためにいくら必要か。高坂さんは店を開いた34歳当時、その金額を月20万円と決めた。そこから逆算した売り上げは月60万。これ以上は儲ける必要がないので、この基準値を上回ったときは、下げるために営業日を週5日から4日に減らし、メニューも減らした。

ランウェル代表
関根雅泰さん(43)
取材時も0歳の次男が泣きだすと、飛び出して泣きやませる係を買っていた



捨てたもの

- 起業家としての名声を求めること
- 博士課程に進み、研究者になるという道

↓

得たもの

- 家族との時間
- 地域とのつながり

「拡大しない」を選択する

で会話が生まれることもある。客の満足度は高く、黒字経営が続いている。「経済成長を追い求めてうまくいく時代ではない。アップしよがないなら、逆手にとつて、

価値観を転換するほうが幸せに生きられる」
大学卒業後、第1希望だった大手小売企業で働いた。業績は同期のなかでもトップクラス。出世街道を上つていくのは快感だった。だがバブル崩壊後、景気は後退し、モノは売れなく

なった。心身をすり減らして働いても、無理のある売り上げ目標は達成できない。疲れ果て、うつ病の一手手前で会社を辞めた。

当時、周りに対しては、「バ I をやりたい」という夢を追うために会社を辞めるのだ、と強気に振る舞ったが、逃げが7割ぐらいだったと振り返る。

捨てたもの

- 消費主義と果てしない欲望
- 会社勤め、必要以上の収入

↓

得たもの

- 好きなことで生きる道
- 「農」へのコミット、自給

研修は年間80日まで

「いい家や年収ではない何かで社会を見返してやろう」と思っていました。金を持っているやつらよりも幸せに生きられることを証明してみせる、と」
今は、世の中を変えていくためのモデル作りを考えている。休日には千葉県匝瑺市の田畑に通い、米と大豆を自給する。生活に農的要素を入れると生きる安心感を得られるし、自然からインスピレーションももらえる。

企業内人材教育に携わるランウェル代表の関根雅泰さん(43)。12歳から0歳まで4人の子どもを育てる父親でもある。子育てをきっかけに、10年前から移住を画策。縁があった埼玉県ときがわ町にイターンした。研修や打ち合わせのために、都内に出るのは週3日ほど。研修業界では、普通売れっ子になると年間150日程度は研修に費やすというが、関根さんは、年間80日までと決めていて、それ以上は依頼があっても断る。従業員も妻だけで、増やす予定はない。

格差社会から自由になる3原則

自分の軸を持ち大切な価値を見極める

年収、出世、周囲からの評価……。上には上がいて、抜けられない競争ジレンマ。かつての大量中間層は消え、私たちは厳しい階層社会に巻き込まれている。どうすればここから自由になり、幸せに生きていけるのか。先駆者たちの選択に処方箋がある。

ライター 古川雅子 編集部 高橋有紀



高坂勝さん(44)
主宰するNPO「SOSA Project」では、農作業を通じて自立する取っかかりを作り出すことを目的としている